

外国人と日本人とが、ともに豊かに生きる地域社会を！

ハロー フレンズ



ふじみの国際交流センター
Fujimino International Cultural Exchange Center

2018年 冬号 (季刊) 第146号

あけましておめでとうございます

お元気に新年を迎えられたことと思います。いつも変わらぬご支援・ご協力に感謝しております。

景況感の改善が大企業から中小企業にも波及したせいaka人手不足が深刻化し、外国人も簡単に仕事に付けるようになったらしく、悩み事、生活相談が極端に減りました。DV被害でシェルターに入居した人も、28年度は3家族184日でしたが、29年はゼロでした。相田みつをさんのカレンダーに『かねが人生の全てではないが、あると便利、ないと不便です。便利の方が良いな』とありますが、家計が潤うと家庭内の揉め事は少なくて済むようです。

FICECは開設22年目に入ります。北朝鮮やアメリカの動きを考えると戦々恐々の毎日ですが、こんな時こそ「多文化が未来を拓く」を実証していきたいと思い、いくつかの目標を立てました。

- ① 日本語学習をさらに充実させ、言語の壁によって発生する様々な障害を軽減する
- ② 身内ではないけれど「信頼できる重要な他人」として一人ひとりに寄り添い、直面している問題を解決する
- ③ 地域からの孤立を防ぎ顔の見える関係になる
- ④ 外国ルーツの子どもを無職にしないために、基礎学力が身に付くよう指導する
- ⑤ 在住外国人のスキルや経験を生かした事業を開発するとともに、交流活動を展開する
- ⑥ 21年の活動から知り得た在住外国人の実状を可視化し、啓蒙したり、社会に提言する
- ⑦ 社会情勢に即した多言語での情報を提供し、「知る権利」を保証する
- ⑧ 個人エンパワーメントからチームエンパワーメントに発展することによりFICECの組織拡充を図る

目標が多いほどやりがいもあると思います。今年もどうぞよろしくお願いいたします。



「なぜ外国人は病院へ行きたくないのですか」

—「外国人お茶会」の報告書—

安 銀柱

医者 「痛いですか？」
 ネパール人 「はい」
 医者 「少し痛いですか？」
 ネパール人 「はい」
 医者 「すごく痛いですか？」
 ネパール人 「はい」
 医者 「痛くないですか？」
 ネパール人 「はい」



この笑うに笑えない話は、日本へ来たばかりのあるネパール人が病院へ行った時の実話です。日本語がまったく分からず、医者への質問にとにかく「はい」としか言えなかった彼の話は、日本語が分からないまま日本へ来た外国人なら、一度は経験したはずです。

体調が悪い時は、その病気が大きくなる前に治療をしなければいけない。その当たり前なことが出来ない外国人が、沢山います。私は10月、「外国人に、大病になる前にちゃんと病院で治療をうけてもらうためにはどうすればよいか」という問題を改善するために立ち上がった、「町のひろぼと順天堂大学との協働プログラム」の会議に参加させていただきました。

そして、この協働プログラムのチームの主催で、12月2日に三芳町で行われた「外国人健康相談会」に先立って、FICECでは11月26日にセンター2階にて「なぜ外国人は病院へ行きたくないのですか」、というテーマについて話し合う「お茶会」を開きました。

このお茶会には、台湾(5名)、中国(3名)、韓国(3名)、

タイ(2名)、日本(4名)が参加して、お茶とケーキを囲んで行われました。

普段は日本語に自信があったのに、子どもの事故で慌ててしまって、「ビー玉が鼻に入った」、と言わなければいけないのに、間違えて、「ビー玉を鼻に入れた」、と言ってしまった面白い失敗談や、薬だけで治る消化不良なのに、言葉が通じない不安で内視鏡までしてもらった話などを聞き、総合病院だけでも手軽に利用できる通訳システムの必要性を痛感しました。

そして、日本のシステムに頼るばかりではなく、いざという時に救急車を呼べるくらい喋れるよう、日本語の勉強の大切も語り合いました。

国民医療保険に入る、毎年健康診断を受ける、そして、日本語の勉強をする事は、他国である日本で、自分と家族の健康を守るために、とても大事な事です。

今回のお茶会の結果が、先生方の研究に少しでも役に立ち、外国人が病院を敬遠する事なく、安心して暮らせる日が早く来てほしい、と願ってやみません。



5カ国、17名で日本の医療問題について話し合いました。



「前進」 真庭美奈

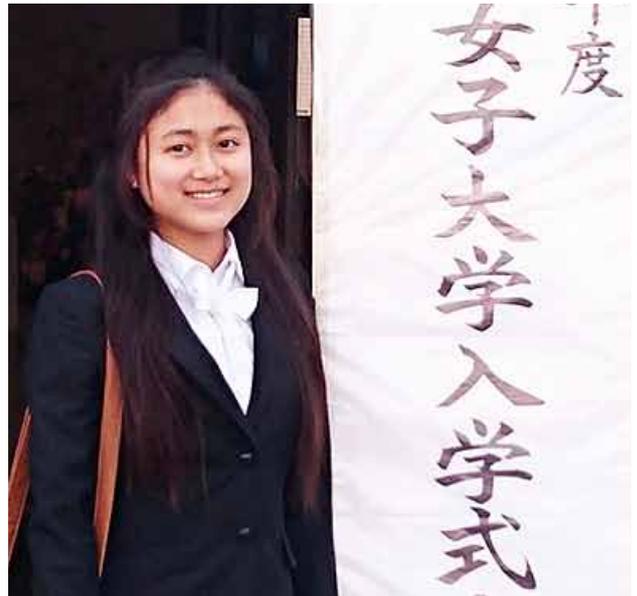
4年前まで、母親の母国であるフィリピンで暮らしていた。充実している学校生活、友達に囲まれているなかで、日本に行く決断をした。日本で教育を受ける方が経済的にも、私の将来の夢を叶えるためにもいいことがわかったからだ。私にとって、フィリピンで大学に行き、希望する職に就くのは難しいことなのだ。

母と弟とも離れ、困ることばかりだった。ホームシックになり、文化も違い、言葉も分からない。そこで、日本語の勉強をするために埼玉県にあるふじみの国際交流センターに通った。ボランティアのスタッフたちが優しく、母親のように温かく接してくれた。週5日間毎日4時間半くらいで教えてくれた。そして、土曜日にも(当時)上福岡であった子どもクラブに通った。日本で何もわからない私に、希望を与えてくれた。進学する高校も探してくれて、高校まで連れていってもらって、色々な手続き、面接の練習、高校受験の勉強など、全部FICECがやってくれた。長い間会ってない父の連絡もしてくれた。8カ月後、群馬県にいる父と引っ越すことになり、また家族と別れたように感じた。

無事沼田高校定時制に入学した。最初はとても不安だった。1年生のとき、漢字の読み方、言葉の意味などが分からず、どうやって勉強すればいいか分からなかった。全教科の教科書を全て英語に一旦訳して、その言葉の意味、読み方も覚えるようにした。作業量の多さに途中で何回も諦めた。フィリピンに帰りたいと何度も思った。帰れば家族が、友達がいる。

それでも私には夢があった。夢が自分を頑張らせてくれた。授業がわからず、困っていると先生たちが一生懸命に英語で説明してくれた。だんだん授業が理解できるようになった。友達と話していると途中でわからなくなってしまうこともある。友達は電子辞書を使いながら優しく説明してくれた。人に恵まれていると感じた。

1年生の終わり頃からバドミントン部に参加し、放課後毎日練習し、大会にも出ていった。2年生になる前の春、家の近くの食品会社でアルバイトを始めた。豆腐作りの作業をしていた。朝早くからの仕事で、部活動を遅くまでやっているということもあり、毎朝起きるのが辛かった。家を出るのが遅くなってしまい、走って職場まで行っていた(笑)。2年生からは、生徒会長になり、バドミントンの定通制全国大会の出場をすることもできた。団体で優勝できなかったが、2回戦を勝ち抜くことができ、神奈川県箱根温泉ホテルで泊まり、とても楽しくて良い経験だった。3年生の時は、担任の先生は大学を探してくれて、



色々な手続き、オープンキャンパスまで一緒に行き、私の大学に行く決断について反対だった父は担任の先生が話してくれたおかげで、賛成になった。最終的に、群馬県立女子大学の国際コミュニケーション学部のAO入試を受けることになった。10分プレゼンテーションと10分面接。その練習は毎日放課後、担任の先生と橋爪先生とやっていた。そして、その当日は電車とバスで行くつもりだったが、それを聞いた橋爪先生が許さなかった。それは一番大事な日、その結果で私の人生は変わるものだから、その日に電車とバスで行く無駄なエネルギーを使わせたくないと言ってくれた。それでAO入試の日に橋爪先生が大学まで送り迎えをしてくれた。人に本当に恵まれていると感じた。結果は合格だと確認すると、嬉しすぎて泣いた。人生で幸せの涙が出たのは始めてだった。

今は大学に通いながら、コンビニでのアルバイトをしている。

日本語をもっと上手に話せるように。漢字を覚えられるように。国際関係の知識を得て、JICAのような開発途上国の国際協力を行っている団体に就くことが私の夢である。ふじみの国際交流センターの人たちが、高校の先生や友達が、日本語がわからず不安だった私に温かく接してくれたように。





スタッフ紹介

ここに来るまでは、知らなかった... 高橋真梨子

こんにちは。高橋真梨子と申します。

こちらでお世話になってからはや10カ月、いまだに見ること聞くことに驚かされている新米スタッフです。センターの皆さんは石井さんをはじめ、親切で頼もしい方ばかりで、私の(ひそかな)あこがれです。

困りごとをかかえた相談者の話にじっくり耳を傾け、あるときは一緒に市役所へ行き、あるときは不動産屋へ、あるときは学校へ、あるときは通訳をし、またあるときは離婚した外国人女性にかわって遠くまで日本人男性にサインをもらいに行き、と皆さん縦横無尽の活躍をされています。恥ずかしながらここに来るまでは、そういう話は聞いたことがありませんでした。

私がセンターを知ったきっかけは、何気なく見ていたテレビ番組です。そこで生活相談の様子や、日本語教室などが紹介されていました。「自分はなんにもできない、でも海外とつながりのあることがしたい」とつねづね考えていたことと、そのころは短

期留学で行ったセブ島にハマっていて、「もしかしてフィリピンの方とも、お知り合いになれるかな」という淡い期待が重なり、ある日、勇気をだしてセンターを訪ねました。

訪ねてみると、驚くほどすんなりと笑顔で迎えていただき、さいしょは日本語教室、ほどなくして金曜日のお当番に入れていただきました。スタッフの皆さんは普段は本当にやさしくておだやかで、お当番の日はとても楽しいです。なんにもできない自分がお当番していいのかしら、と最初こそ恐縮していましたが、今ではなんにもできなくても参加できるのがボランティアの長所だと思えるようになりました。

今は少しずつですが、翻訳の仕事もできるようになってきました。

皆さんのような頼れる存在になるには百年早いと思いますが、一步でも半歩でも、近づきたいと思いますので、これからもご指導よろしく願いいたします！！



「多様性に富んだチュニジア」 フダ セラミ

チュニジアはアフリカの最北端にある国です。国土が16万5千平方キロメートルの広さしかないにもかかわらず、さまざまな景色を堪能できます。険しい山々、サハラ砂漠、そして地中海の壮大なブルーと白で縁取られた国の東と北側の海岸…。

現在のチュニジアの公用語はアラビア語ですが、現地ではアラビア語とフランス語、そして南部のチュニジアベルベル諸語が混ざってできた言葉が話されています。大学での勉強は、ほとんどフランス語と英語を使用するので、多くのチュニジアの学生は卒業時には二つ以上の言語が話せるようになります。

古代は、チュニジアにはベルベル人が居住していました。チュニス(※チュニジアの首都)は、ベルベル語でチェニェスと呼ばれていました。やがて多くの文明人たちが外から自分たちの地位を築くためにやって来ました。紀元前12世紀のフェニキア人(カルタゴ市を建設)、紀元前146年のローマ人(エルジェム円形劇場を建設、ローマにある有名なもの

の小さいコピー)、その後の647年のアラブ人、それからオスマン帝国のトルコ人、最後は1881年から1957年のフランス人と、それらの占領はチュニジアに彼らの文明のもっとも良いものを(と同時に、時には最悪なものも)与えました。そしてその結果として素晴らしく多様性に富んだ記念碑、文化、食べものがチュニジアにはあるのです。



世界遺産に登録されたエルジェム円形闘技場遺跡

この方もFICECの活動を応援してくださっています

湯浅 典人さん

(文京学院大学)

私はいまトルコのアンカラに住んでいます。所属大学からの1年間の在外研究で、アンカラ大学日本語・日本文学科に受け入れていただいています。2017年4月にこちらに来たときには、右も左もわからない状態でした。トルコ語がほとんどできないせいもあって、バスの乗り方、買い物の仕方、食堂での注文の仕方など、生活のすべてにわたって戸惑うことばかりでした。もっとも大変だったことは、在留許可カードの取得でした。移民管理局への申請前に、いろいろな書類を揃えなければなりません。公証人がサインしたアパートの契約書類、健康保険の加入証明書、アンカラ大学の受入証明書、写真などです。そして、インターネットのサイトから申請登録をするのですが、これがなかなか難しい。アンカラ大学の先生に、公証人への同行、書類の準備、申請の入力など、すべての面にわたって手伝っていただきました。そしていざ移民管理局に行き、個別面談したのですが、在留期間の記入間違いと書類不備でいきなり却下されました。その後なんとか書類を整えて、再度申請し、ようやく認められました。許可を得るまでに、3カ月もかかってしまいました。現地の言葉ができない外国人にとって、役所への申請がいかに大変なこと

あるかを実感しました。トルコの隣国シリアでは、2011年に始まった内戦によって、630万人の国内避難民が発生し、530万人が国外に逃れています。トルコは、内戦発生後からシリアからの難民を受け入れ続けています。その数は、いまでは320万人に達し、世界最大の受け入れ国となっています。多くの難民が来ることによって、さまざまな問題が発生しています。それでもトルコ国内で、難民の排斥運動が起きず、また排除を主張する政党もないことは、驚くべきことです。異なる民族、異なる文化をもつ人々の受け入れは、簡単なことではありません。帰国するまでに、難民の現状や支援のあり方について理解を深めたいと考えています。

私はいま「外国人」として暮らしています。トルコの人々の私に対する態度や行動が生活に大きく影響すること、困ったことを相談し助けを得ることができる人の存在がとても重要であることを実感しています。ふじみの国際交流センターは、交流の場を作り、人々のさまざまな困りごとに対して、個別にきめ細やかな支援をされています。日本で暮らす外国出身の方々にとってセンターは「安心できる場所」であると思います。これからも力強くその活動を進めていかれることを期待しています。

見送りの3振より空振りの3振 パートII 石井ナナエ

○月○日

家庭裁判所調査官からの依頼で、ベトナム人留学生A君の鑑別所出所後の世話人探しに没頭した。鑑別所という所は罪の重さを鑑別する所で、重罪であれば入管にすぐ連絡して強制退去になるが、家宅侵入で捕まったA君は住む所がないという理由で収監されただけで、保護観察もつかずに20歳の誕生日の前日に出所するらしい。

頼まれればいやと言えず、あらゆる人脈を頼って問い合わせに奔走し、教会の牧師さんに引き受けていただけることを確認して、ベトナム人通訳スタッフに面会に行ってもらった。A君はハノイから遠く離れた奥田舎から来た子で、『日本に行けば日本語の勉強をしながら月30万円は稼げる』と言う業者に勧誘され、親戚から大金を借りて来日したらしい。心配する通訳者を前にA君は「もう一度友達のアパートに住まわせてもらう。借金があるのでベトナムには帰れない。働いてお金を儲ける」と明るく話したという。

政府は資格外労働ビザの就労可能時間を延長することを考えているようだが、純真な若者がこれ以上罪を重ねないように、取り返しのつかない人生にならない

ように、悪徳勧誘業者やすべて承知で受け入れている日本語学校経営者をとりしめるべきだと思う。

○月○日

「ネットワークSAITAMA21運動」運営委員会主催のシンポジウムに参加した。北本と越谷の労働組合とNPOの協同事例発表の後、早稲田大学教授の柴田先生による講話を聞いた。「連合の力でボランティア関連法ができた。労組には潜在的なボランティア希望者が沢山いる上に、様々な技術を持った人も多いのだから、地域の労働組合とNPOがコラボして欲しい」と話された。

「NPOはボランティアベースで活動している。これからはいろいろな所と関わっていかねばならないが資金を集めるのに奥手であり、組織の運営上の人的資源が不足している。互いの長所を生かし短所を補ってハッピーを共有する必要がある」とコラボレーションの必要性を強調された。労組の事情や活動方針を伺ったのは初めてで目から鱗、棚から餅の感がした。その後開かれた交流会でもNPOのために何かしたいと考えて下さっている組合員の方達と話をすることができ、今後が期待できる有意義な1日になった。

10月7日(日) 富士見市主催 **国際交流フォーラム 2017** @キラリ☆ふじみ

国際交流フォーラムでは「外国籍市民の主張」と「外国のゲーム」を行いました。

「外国籍市民の主張」では、中国人のスタッフが日本に来たばかりの頃に困った経験と、日本と中国の家事・育児分担についての考え方の違い、文化の違いについての話をしました。「外国籍市民の主張」の司会もFICECで担当しました。

外国のゲームは、韓国の「ユッノリ」と、フィリピンの「スンカ」をしました。「ユッノリ」は、小さな子どももすぐに出来るゲームで、親子での参加が多かったです。「スンカ」は小学生の子どもたちから大人まで挑戦していました。



10月7日(日) ふじみ野市主催 **アートフェスタふじみ野2017** @ソヨカふじみ野



アートフェスタふじみ野では、フィリピン人スタッフとその仲間たちが仕事や家事の合間をぬって何週間も練習を重ねた民族ダンスやバンブーダンスを踊ったほか、韓国とフィリピンの遊びで参加しました。

韓国の遊びは「チェギチャギ」を、フィリピンの遊びは「ジャックストーン」をしました。子どもたちにカラフルな「チェギチャギ」を手作りしてもらい、そのあと遊びかたを教えてあげました。



「一食を捧げる運動」で寄付をいただきました

10月15日に立正佼成会の「一食を捧げる運動」の一環として247,000円をいただきました。会員の皆さんが食事を抜き、その食事代を世界の苦境にあえいでいる人々や、地域で困難な状況にある人々に献金してくださる運動だそうです。ふじみの国際交流センターの活動に理解をしてくださり、「頑張ってくださいね」と励ましの言葉をいただきました。

おめでとうございます！

ずっとFICECで国際交流のスタッフとして活躍していたパキスタンの女性が、結婚のため国へ帰ります。

おめでとうございます！

さびしくなりますが、幸せを祈っています。



パソコン教室で年賀状

パソコン教室では、年末恒例の年賀状づくりをしました。Wordの図形を使って「戌(いぬ)」の字を作ったり、写真の色を変えてトリミングをしたりして作りました。



「そば打ち体験」をしました

できたそばを、みんなで食べました。太さも長さもバラバラのそばでしたが、みんなで食べるそばはとてもおいしかったです。



センターの活動をご支援ください
会員・賛助会員・寄付のご案内

●活動を担う会員…正会員

正会員は、スタッフなどとして活動を担っていただく会員です。この会員は、総会などでの議決権をもちます。

年会費: 個人1口3,000円、団体1口10,000円

●センターを財政的に支える会員…賛助会員

賛助会員は、センターを財政的に支えていただく会員です。総会等での議決権はありませんが、センターのイベントなどのご案内や、機関誌をお送りいたします。

年会費: 個人1口3,000円、団体1口10,000円

会員、賛助会員にはこの機関紙をお送りします

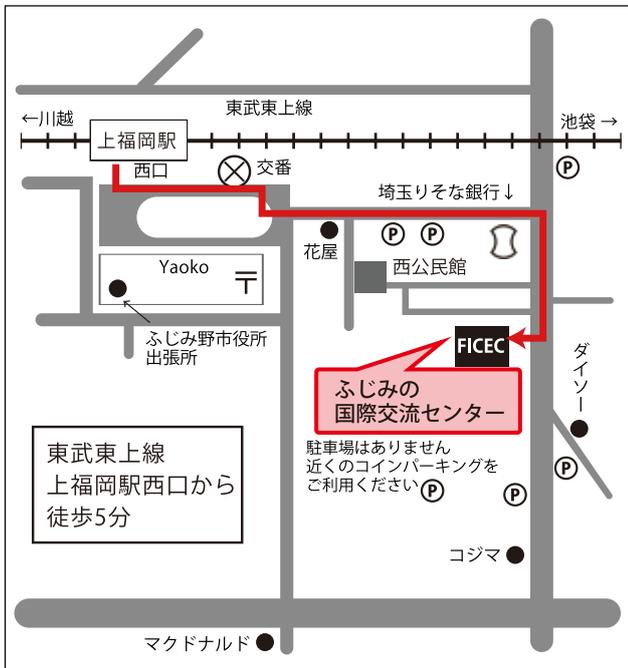
郵便振替口座: 00110-0-369511
 口座名: ふじみの国際交流センター

外国人生活相談 無料

月曜日～金曜日 10:00～16:00
 電話: 049-269-6450

困っている外国人の方がおられたら
 センターをご紹介ください。

※コピー代など料金がかかる場合があります



埼玉県指定・認定特定非営利活動法人
ふじみの国際交流センター

〒356-0004 埼玉県ふじみ野市上福岡5-4-25
 TEL: 049-256-4290 FAX: 049-256-4291
 生活相談専用電話 049-269-6450

ご寄付をいただいた方々
 ご支援ありがとうございます

- 2016年4月1日～2017年12月20日(順不同・敬称略)
- 佐藤光江、樟山直美、加藤久美子、立麻肇子、安部幸枝、金澤国勝、佐藤義治、戸塚成子、駒形一夫、神田順子、邱垂蘭、吉永、鈴木譲二、尾浦邦彦、新井良司、栗嶋三千代、村山光代、金田康好、木村不二雄、マストラ、ニーランティ、市川波穂、阿澄康子、小林暁美、湯澤直美、市川まなみ、松下敏恵、深見水季夫、本多香、竹内直江、田中つや子、中山明子、上島直美、矢澤美紀、寺村壁如、新井順子、森田信子、木村澄江、松村芳枝、石塚雄康、木場ひろみ、安銀柱、江科、太田原裕、岩田愛子、伊藤真弓、李李銘、坪田幹男、小熊一雄、粕谷光宏、中村禎作、野澤弘子、市川いずみ、金子佐記子、島田道子、新井洋子、佐藤裕悦、八重樫紀久枝、大室昭浩、仲野谷美恵、星野秋梅、小林久美、鄭玄淑、石井ナナエ、岩田仁、長谷川正江、小熊千寿子、穴沢エミリン、山畑博子、荒田光男、山崎友理、岩田愛子、佐竹裕子、山根健吾、李季銘、(株)美好、東入間地区遊技業防犯協力会、かめのり財団、一食推進委員会、朝日子どもの貧困助成事業、(株)吉岡

※埼玉県指定・認定NPO法人ふじみの国際交流センターに寄付をしてくださった方は、税金の優遇を受けることができます。

ふじみの国際交流センター		
サービス案内		
外国人	国際理解教育	3,000円+交通費+事務費
ゲスト派遣	外国料理教室	5,000円(材料費別途)
日本人	多文化共生講座	20,000円+交通費
講師派遣	ボランティア講座	(活動運営のためご協力ください)
企画・運営	国際交流・国際理解に関するイベントや研修の企画・運営等	内容・予算に応じて相談
編集・出版	多言語による情報誌・ガイドブック・チラシなどの制作	
翻訳	婚姻関係、ビザ申請、履歴書	A4 2,000円/ページ
	その他文書	A4 3,000円/ページ
通訳	半日5,000円+交通費	
見学・研修(資料代として)		1,000円/人、日

ボランティア活動に、ご参加ください

ふじみの国際交流センターでは、日本語指導をはじめ、生活相談・外国籍市民との交流・手助けをするボランティアを募っています。ぜひ、電話またはホームページから、お気軽にご連絡ください。